

## 婦人科一般診療を主とする産婦人科クリニックの実際 —慈恵医大産婦人科卒の3代目として—

平成10年卒 松本直樹

私は退局後、2015年から埼玉県本庄市にある松本産婦人科医院を後継し無床診療所院長として診療しています。当院は祖父（松本包嘉，S15卒）が1950年ごろに開院した産婦人科診療所で、戦後の分娩とその近代化を支えてきたようです。祖父が急逝した後、父（松本常嘉，S43卒）が後継し1978年に現在の診療所を設立。当地域の多くの分娩需要に長い間応えてきました。2007年に分娩取扱いを終了し以降は主に婦人科一般診療を行ってきました。

私はもともと過重・過大な労働・拘束を伴う分娩を小さな診療所で扱う意向はありませんでした。しかしいよいよ診療所後継するとなると、分娩も生殖医療も扱わず経営していくことに対する不安もありました。そのため対応可能な範囲で幅の広い診療を行えるよう準備し心がけ、並行して女性ヘルスケア専門医・指導医、乳腺疾患認定医を取得しました。現在の診療内容は、婦人科一般診療、女性内科（貧血、生活習慣病、骨粗鬆症など）、不妊管理、妊婦健診、ピル等、地域の頸がん検診・健康診断、乳房超音波検診、日帰り手術（中絶、流産、円錐切除、マイクロ波子宮内膜焼灼術（MEA））、予防接種等です。

院長として診療を始めてから8年が過ぎました。同窓会等でよく聞かれる質問に「婦人科一般でやっていけるの？」があります。現状では「薄利多売ですがなんとかやっています」と答えることが多いです。参考として当院の診療データを示します。最近1か月間の初診問診票を集計すると、年齢分布として20歳代が最も多く、次いで40、30歳代でした（図1）。地域の頸がん検診を除いて、初診時の診断または主訴で分けてみると「月経関連症状・PMS等（39歳まで）」が最も多く、次いで「膣炎・STD」、「月経関連症状・更年期等（40歳以上）」でした（図2）。2022年の収入における内訳を分類してみると保険診療が75%を占め、以下地域頸がん検診、自費ピル等、妊娠中絶と続き、ここまでの収入のほとんどを占めました（図3）。

保険診療において、婦人科一般診療の追い風は2020年に新設された婦人科疾患治療管理料です。器質性月経困難症に対するホルモン療法を行う際に算定できます。いままで加算を取りにくい婦人科一般診療において極めて大きな前進でした。低用量ピル（LEP）を中心にジェノゲスト、レルゴリクス、ミレーナなどを積極的に活用し薬物治療を行っています。また婦人科的貧血にも注力しており鉄剤投与、LEP等に加え、過多月経に対するMEAも行っています。現在まで47例のMEAを実施し、その短期的な有効率（術後1年）は94%でした。

地域頸がん検診を積極的に行いまた精査も行っています。その2022年の要精査率は5%、自院の精査実施率は98%で、CIN1以上がそのうちの60%（既知のCINを含む）、CIN3は3%でした。またHPVワクチン定期接種が再開となりました。産婦人科医が中心となり対応すべき部分と思い日々推奨し接種しています。

人口妊娠中絶は変わらず多くのニーズがあります。静脈麻酔下・電動式吸引法による手術を行っています。希望者が受診するたびに産むことを再考するよう諭すのですが出産に切り替える方はごくわずかです。術後の避妊指導までサポートするようにしています。

私は3代目院長に就きましたが分娩を引き継ぐ力はありませんでした。それでも歴史ある医院の院長として地域の女性のためになるよう、最新の医学知識に基づいたより良い医療を提供し続けたいと思います。そしてさらなる慈恵産婦人科教室の発展も期待しています。

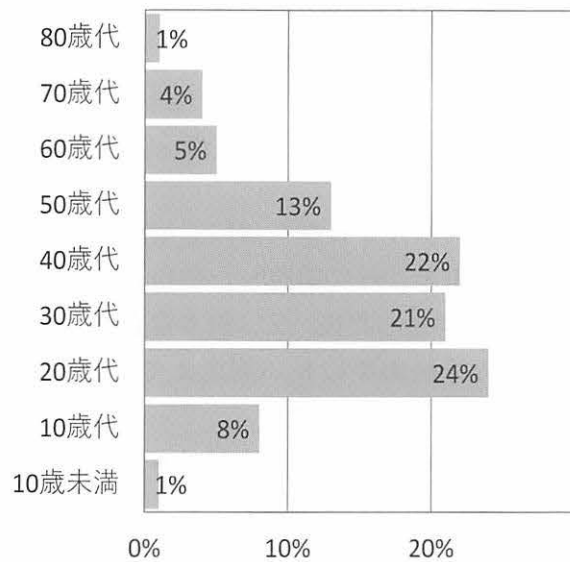


図1 年齢分布

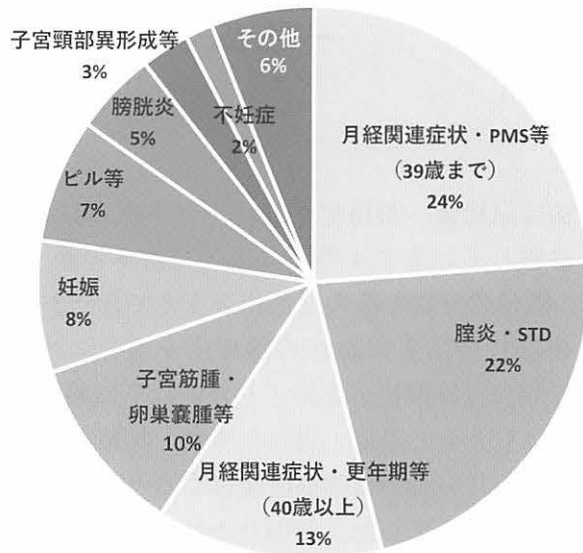


図2 初診時の診断または主訴

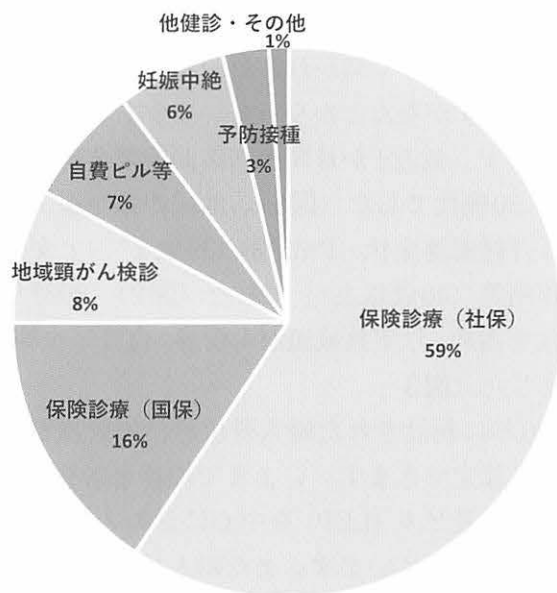


図3 収入における内訳別割合

# Alumni Society

The Jikei University School of Medicine  
Department of Obstetrics and Gynecology

2024, April No.41



*120th Anniversary of Foundation of The Department*

## 編集後記

120周年記念と日産婦学会が重なって教室員も同窓も忙しいやら嬉しいやらの日々でした。本当に御苦勞様でした。

さて、20年前、我が産婦人科開講100周年の会が帝国ホテルで開かれ、立派で分厚い100年誌が発刊されました。

そこで120周年記念誌は田中会長の意向で、この120周年記念誌を同窓会誌に特別記念号として掲載する事にしました。100周年誌を作成した市毛敬子先生に担当して頂きました。100周年誌を読んだ事も見た事もない若い先生方にも分かりやすいようプロの執筆家の如く、豊かな語彙と流れる文脈で完璧にまとめられており、誠にその内容については敬服の至りです。同窓会一同より御礼申し上げます。

120周年記念にふさわしい表紙を考えました。単純な考えで120年前の慈恵はどんな風だっただろうと思いを馳せ、ちょうど120年前の写真と出会いました。車を運転しているのは、学祖の高木兼寛先生という事で、これは面白いと思い、更に写真屋さんに頼んで今の技術でカラー写真にしてみました。120年前のセピア色から、ついこの間撮ったような写真になりました。



この写真についてはコラムを読んでみて下さい。現役の先生方が臨床・研究・教育に頑張っている事は内容を読めば良くわかります。又、OB・OGの文章は伝統の語り部です。味わって読んで貰いたいです。

多くの先人や現役やOB・OGの日々の労を細かい糸に例えるならその糸が幾重にも紡がれ、やがて太い綱となり後世に伝えられていく事が伝統だと思われれます。伝統って素敵な事ですね。

広報部・森本 紀

## 会報第41号

令和6年4月

発行人 東京慈恵会医科大学産婦人科学教室同窓会「妙手会」

印刷 スピックバンスター株式会社

文京区関口 1-47-12

電話 03(3260)8151